

14 はげまし合った夜

東日本大震災^{しんさい}の夜、人々がどのような夜を過ごしたのかを考えよう。

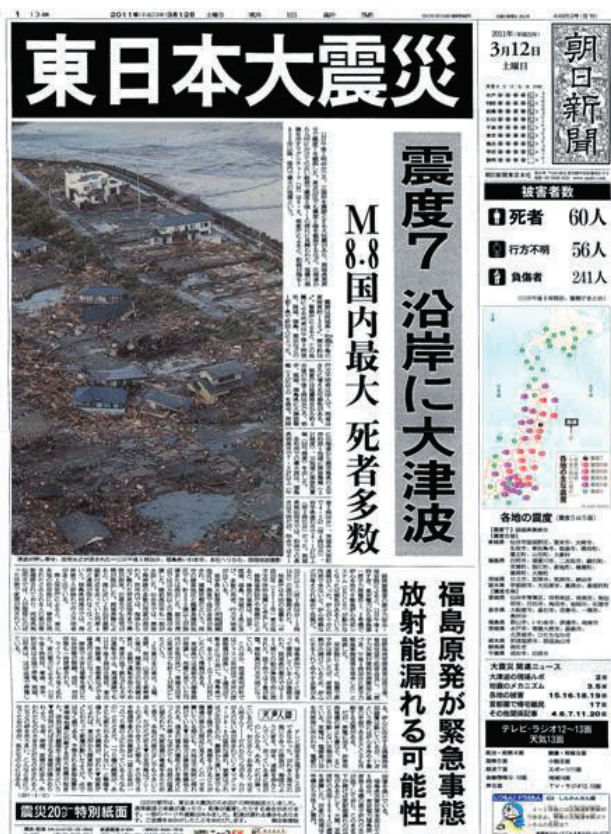
平成23年3月11日の東日本大震災^{しんさい}で、石巻市内^{うみそ}の海沿いや北上川とその支流^{しりゅう}に近い地域^{ちいき}は、これまでにない大きな被害^{ひがい}を受けました。

津波から逃^つれることができた人々は、避難所^{ひなんじょ}や自分の家で、地域^{ちいき}の人々や家族と不安な夜を過ごしました。ライフライン（電気・水道・ガス）は使えなくなっていました。ラジオなどでニュースを聞くことはできましたが、携帯電話^{けいたいでんわ}やメールが使えなくなり、家族や友達とまったく連絡^{れんらく}ができませんでした。

人々は、お互い^{たが}はげまし合い、助け合って、不安にたえながらがんばりました。

○子どもたちもがんばった夜

大地震そして津波が街をおそった日、避難所^{ひなんじょ}になったある小学校では、避難した700名余りの人々が身を寄せ合い、寒い夜^{さむ}を過ごしました。3月とはいえ、夜になると気温が下がり、はく息は真っ白です。



平成23年3月12日付「朝日新聞」



みんなで教室の机つくえやイスをろう下に出し、学校中のカーテンをはずして体に巻きつけたり、床にしいたりしました。学校の先生方の体育着やスーツ、靴などは避難してきた方の着替えとして使っていただきました。5・6年生の子どもたちの体育着も、ほとんどが避難者の方の着替えとして利用されました。また、この学校には、非常時用の水や食べ物、毛布などの蓄えたくわはありませんでした。

先生方や地域のリーダーの方が中心となって、職員室のコーヒ一用のシュガースティックや放課後児童クラブのおかしを少しずつ分け、子どもとお年寄りだけにとお願いして配りました。子どもたちは、あめを1個またはシュガースティック半分という夕食となってしまうましたが、どの子もわがママを言わず「ありがとう」と言って受け取っていました。また、「おうちに帰りたい」と泣き出してしまった1・2年生の子を優しくだっこしてあげる5・6年生のお兄さん・お姉さんの姿もありました。

こうして照明も暖房もない中、命をつなぐために声をかけ合い、はげまし合って大震災の日の夜を過ごしました。



◎「はげまし合った夜」を読んで、考えたことを書きましょう。
